

# かささぎ

通信 第98号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2020年 12月 11日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年十一月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』（1996、刈谷市教育委員会）所収の「赤穴宗右衛門兄弟」（1931.3）を読みました。

「赤穴宗右衛門兄弟」は『赤い鳥』に初めて掲載された森三郎二十歳の時の作品です。茅原順三の名前で発表されました。この作品の原典について、森三郎は「私の記者時代」（1988、『赤い鳥代表作集3後期』）の中で次のように言っています。

『赤い鳥』復刊第一号に出た「読物の御提供」を見て、私は上田秋成の「雨月物語」の中の「菊花の契り（ちぎり）」という怪談を、小泉八雲が「約束」という自分のものに書き直しているのを、童話に書いて御提供申しあげて見たのであった「……」。

「赤穴宗右衛門兄弟」の話は、兄の赤穴宗右衛門が命を懸けて弟・長谷部左門との約束を守る話です。ある年の春、播磨の国の浪人赤穴宗右衛門が、九月九日菊の節句の日にならず帰ると、弟に約束して百里も離れた郷里の出雲に旅立ちます。しかし、捕われの身となり帰ることが出来なくなりました。生きては帰れないが、弟との約束をはたすために九月九日の夜に自害して、弟の元に帰ってきます。「死んだあと魂は一日に千里をはしる」という言い伝えを思い出したからです。翌朝弟の左門は出雲に出かけ、兄を監禁した従兄弟の赤穴丹治を切り殺し、仇を取ります。

森三郎は兄・森銚三とその友人の萩原恭平が翻訳した『小泉八雲選集』（1926）の中の「約束を守る」を基にして子ども向けにこの話を書いたといえます。「読む会」でこの話を取り上げるのは二回目になるので、今回は三郎の「赤穴宗右衛門兄弟」（「赤穴」と略）の表現を、銚三・萩原の「約束を守る」（「約束」と略）と比較してみました。

①（約束）では二人の関係を義兄弟としています。これは秋成の『雨月物語』の原話のままです。宗右衛門のことを地の文では「赤穴」、母親は「赤穴殿」、左門は「兄上」と呼んでいます。（赤穴）では二人は姓が違うものの、母親は息子に対する呼び名で「宗右衛門」と言い、左門は「お兄さま」と呼んで、二人は兄弟の関係になっています。

②赤穴が出雲に帰った時、城は経久に横領され、ほとんどの人が彼に仕えていました。その豹変に対し、（約束）では「先君塩谷殿の御慈悲を忘れ」と表現しています。（赤穴）では「先君のおなさけにあづかった多くの家来たちが、その義理をもわすれて」と言っています。

③今の城主経久は狡猾で残忍な男でしたが、宗右衛門の仇を取った左門を捕えませんでした。その理由を（約束）は「丈部（はせべ）左門の友情と勇気に歎称することができたのであった」と言い、（赤穴）は「この左門の兄に対する愛情には、すっかり感動して」と言っています。（約束）では義兄弟の話でしたから、「友情と勇気」となっているところを、（赤穴）では「兄に対する愛情」としている点は見逃せません。

④銚三・萩原の（約束）とは違って、『赤い鳥』の原文では（赤穴）の最後に、作者が読者の子どもたちに解説をしている部分があります。その中で「昔の武士が人になりたいして約束をまもる、そのかたい義理だての一例として、又、弟の兄にたいするりっぱな愛情の一例としてのみお聞き下さるやうに」と言っています。作者は、この信じられないような怖い話を、兄弟愛の話として受け取ってほしいとまとめているわけです。また、兄の赤穴宗右衛門は、先君に対する「義理」（②の部分）、約束を守る＝義理立てを大事にするというように「義理」を重んじる人であったと、子どもたちの理解の手助けをしていると言えるでしょう。

左門が兄の宗右衛門の帰りを待つ場面の描写について、「とんび凧」（「かささぎ通信」96号参照）にもよく似た場面があったことも確認しました。この二作品からは自ずと、年が離れていて仲の良かった森銚三・三郎兄弟の関係が想起されるという会員からの声もありました。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品（二〇二一年一月八日実施予定）  
『ピアノ』「祖母」（『森三郎童話選集夜長物語』所収）  
「十二月は休会」